

まちの史跡めぐり

166

町文化財専門委員会

アロス 潤 豊美

江戸時代の表彰制度(1)

宗像郡武丸村の孝行者正助(一六七一～一七五七)について存じの人も多いと思います。インターネット上のフリー百科事典「ウィキペディア」にも「武丸正助」の項があり、「主な親孝行の逸話」を次のようにまとめています。

● 曇りの日、雨が降ると思った父親からは下駄を履くよう、また雨は降らないとも考えた母親からは、草履を履くように言われた正助は、二人の言いつけを守るため、片足に下駄、もう片足に草履を履いた。牛や馬にも愛情を注ぎ、家畜をいたわっていた。荷物を運

んだ帰りは「馬が大変だね」(馬に乗らず、更に鞍を自ら背負つこともある)と馬に乗らぬ、更に鞍を自ら背負つこともある。

● 年老いて歯が弱くなつた両親の前では、硬いものを食べなかつた。歯の丈夫な自分をうらやましく思うことを気にかけたため。

● 父親が酒好きであつたが、苦労している正助に、とある酒屋が酒をただで渡すも、彼はその日からその酒屋に行かなくなつた。「あくまで自分の働いた金で買つて飲ませたい」という理由による。

● 愚直とも言えるほどにまつづくに生きた人物ということについては漢学者が伝記をまとめてあります。

正助の孝行は幕府にも知られ、その伝記は「孝義録」に収録されました。「孝義録」は道徳的にすぐれた行いのあつた人物を調査したもので、全国から八五七九人が記録されているといふことです。一部の人物については漢学者が伝記をまとめてあります。

● 父九郎右衛門は極貧で、九歳のときは、道橋が危なれば父を背に負い、手を引いた。父の病は消渴(現在の糖尿病)で、昼夜に食事を求めるのが一二、三回。湯水を飲むのは三、四〇回に及ぶ。こやは眠るといふだけではないが、側について看病した。暑ければうちわであおぎ、寒ければ自分の身につけた衣を父に重ね、手をさすり、足をあたためた。

● 父と住み始めて一〇年、寝たきりになつて三年が過ぎたある日、父が突然こう言つて、手を合わせた。自分がこんなに大事にされるのは、氏神があわれに思ひ、なんじにのりうつつたにちがない。ありがたいことだ。

● 父は貞享三(一六八六)年の春に

● 拾い、()は本文から補いました。

● 『福岡県史資料』から筑前国糟屋郡の住人を抜粋すると次の通りです。この中には、現在の須恵町に相当する村の名は挙がっています。

● 年次は表彰された年。目次を

● 『筑前国孝子良民伝統編』

● 若杉村 基五(母子前同)

● 次郎 二十四歳 延宝三年(一六七五)

● 奇特者 尾仲村 百姓 九郎左衛門(八十一歳)元禄十一年(一六八九)

● 平素から質素に暮らし、貧しい人を助け、飢餓には粉・銀・米を施し、川を渡れないような所は飛び石をすえ、板をかけて橋とした。

● 孝行者 若杉村 百姓 甚五(母子前同)

● 五年齢不明 明和四年(一七六七)

● 行ぶりは三代藩主黒田光之の知るところとなり、表彰を受けて、褒美ももつた。享保七(一七二二)年九月一日に亡くなつた。

● 『筑前国孝子良民伝』

● 尾仲村 九郎左衛門(前同)

● 中原村 助次郎(前同)

● 延宝二年と翌三年、国中が凶

● 『福岡県史資料』記編一(昭和十六年三月)は福岡県域(旧筑前・筑後・豊前)の

● 民衆で、親孝行などの善行を理由に表彰された人たちの伝記を掲載しています。これらも孝

りましょが、全国区で知名度があるとも言える正助さんは、現代の地域おこしにも貢献して

いて、宗像市武丸には正助ふるさと村が開設され、正助資料館に正助廟、父親を背負つた正助の銅像、正助みそなどの地元産品を販売しています。

● 『福岡県史資料』記編一(昭和十六年三月)は福

● 宗像郡地島に一人暮らしこ

● やという女性がいた。こやは不幸な境遇を送つたが、どんな運命にも明るく立ち向かうたくま

● しさを持っていた。

● 父九郎右衛門は極貧で、九歳

● のこやは米(玄米)一俵で身売り

● して奉公に出た(口減らしの意

● 味もあつたのだろう)。大人に

● なつて、機会があれば落ち着

● き先(婚家先?)を紹介するなど

● と主人が言うので、それを信じ

● うした境遇にも負けず、道徳的

● に讃えられる生涯を送つたとい

● う筋立になつていることが多い

● いよいよ。宗像郡地島の「こ

● や」という女性は記念碑が建て

● られました。私がかつて発表し

● たことのある文章を引いておき

● ます(『リベラシオン』一三四号、二〇〇九年六月)。

● うした境遇にも負けず、道徳的

● に讃えられる生涯を送つたとい

● う筋立になつていることが多い

● いよいよ。宗像郡地島の「こ

● や」という女性は記念碑が建て

● られました。私がかつて発表し

● たことのある文章を引いておき

● ます(『リベラシオン』一三四号、二〇〇九年六月)。

● うした境遇にも負けず、道徳的

● に讃えられる生涯を送つたとい

● う筋立になつていることが多い

● いよいよ。宗像郡地島の「こ

● や」という女性は記念碑が建て

● られました。私がかつて発表し

● たことのある文章を引いておき

● ます(『リベラシオン』一三四号、二〇〇九年六月)。

● うした境遇にも負けず、道徳的

● に讃えられる生涯を送つたとい

● う筋立になつていることが多い

● いよいよ。宗像郡地島の「こ

● や」という女性は記念碑が建て

● られました。私がかつて発表し

● たことのある文章を引いておき

● ます(『リベラシオン』一三四号、二〇〇九年六月)。

● うした境遇にも負けず、道徳的

● に讃えられる生涯を送つたとい

● う筋立になつていることが多い

● いよいよ。宗像郡地島の「こ

● や」という女性は記念碑が建て

● られました。私がかつて発表し

● たことのある文章を引いておき

● ます(『リベラシオン』一三四号、二〇〇九年六月)。

● うした境遇にも負けず、道徳的

● に讃えられる生涯を送つたとい

● う筋立になつていることが多い

● いよいよ。宗像郡地島の「こ

● や」という女性は記念碑が建て

● られました。私がかつて発表し

● たことのある文章を引いておき

● ます(『リベラシオン』一三四号、二〇〇九年六月)。

● うした境遇にも負けず、道徳的

● に讃えられる生涯を送つたとい

● う筋立になつていることが多い

● いよいよ。宗像郡地島の「こ

● や」という女性は記念碑が建て

● られました。私がかつて発表し

● たことのある文章を引いておき

● ます(『リベラシオン』一三四号、二〇〇九年六月)。

● うした境遇にも負けず、道徳的

● に讃えられる生涯を送つたとい

● う筋立になつていることが多い

● いよいよ。宗像郡地島の「こ

● や」という女性は記念碑が建て

● られました。私がかつて発表し

● たことのある文章を引いておき

● ます(『リベラシオン』一三四号、二〇〇九年六月)。

● うした境遇にも負けず、道徳的

● に讃えられる生涯を送つたとい

● う筋立になつていることが多い

● いよいよ。宗像郡地島の「こ

● や」という女性は記念碑が建て

● られました。私がかつて発表し

● たことのある文章を引いておき

● ます(『リベラシオン』一三四号、二〇〇九年六月)。

● うした境遇にも負けず、道徳的

● に讃えられる生涯を送つたとい

● う筋立になつていることが多い

● いよいよ。宗像郡地島の「こ

● や」という女性は記念碑が建て

● られました。私がかつて発表し

● たことのある文章を引いておき

● ます(『リベラシオン』一三四号、二〇〇九年六月)。

● うした境遇にも負けず、道徳的

● に讃えられる生涯を送つたとい

● う筋立になつていることが多い

● いよいよ。宗像郡地島の「こ

● や」という女性は記念碑が建て

● られました。私がかつて発表し

● たことのある文章を引いておき

● ます(『リベラシオン』一三四号、二〇〇九年六月)。

● うした境遇にも負けず、道徳的

● に讃えられる生涯を送つたとい

● う筋立になつていることが多い

● いよいよ。宗像郡地島の「こ

● や」という女性は記念碑が建て

● られました。私がかつて発表し

● たことのある文章を引いておき

● ます(『リベラシオン』一三四号、二〇〇九年六月)。

● うした境遇にも負けず、道徳的

● に讃えられる生涯を